

序文

2002 年、『臨床放射線』の 9 月臨時増刊号として『泌尿器画像診断のすべて』が発刊されました。その序説に「近年、この画像診断の大きな分野に超音波、CT さらには MRI が普及・発展をみ、泌尿器画像診断に広がりや深さが増強されてきた」と記されています。増刊号発刊から 15 年が経過した今、さらなる進歩・発展を遂げてきている泌尿器画像診断をまとめ直す必要性を感じるようになり、2017 年の臨時増刊号として発刊することとなりました。

超音波・CT・MRI・核医学における機器の進歩は目覚ましく、本号の画像を 15 年前の特集の画像と比較すると、その違いは一目瞭然です。画像はより美しくなり、病変が明瞭に描出されてきています。これらが診断学の発展と結びつき、画像診断が泌尿器疾患の診断のみならず治療方針決定・治療効果判定に大きな役割を果たすようになり、その傾向は近年ますます強くなってきています。一例を挙げると、前立腺癌における MRI の役割は非常に大きく、診断の進め方や治療方針の決定に多大な関与をするようになっています。

そのような状況の中で、今回は各論に重点を置きたいという方針から、総論は省略させていただきました。また、核医学（6 項目）と放射線治療（9 項目）は別項目として取り上げています。これは泌尿器腫瘍、特に前立腺癌における核医学・放射線治療の進歩を取り上げる必要があると考えたからです。

この臨時増刊号が泌尿器の画像診断と治療に携わる皆様のお役に立つことを願っています。最後に、大変多忙な中この企画のために協力していただいた執筆者の方々に深く感謝します。

2017 年 10 月
昭和大学 放射線科
後閑武彦